

平成 21 年 11 月 6 日

市議会議員 十番 小宮 教義『平成訥庵イノシシ退治』

『猪鹿逐詰之次第』現在版作成について

人より犬偉き憐れなる三百九年前の、元禄十三年十月六日早朝、城下は季節外れの寒さが足元に張付き、厳原港から微かに漂う海の香りを大きく吸込んだ郡奉行陶山訥庵は、家臣平田類右衛門と一瞬立止まり、そして静かに空を仰いだ。まさに晩秋を迎えんとする有明山の色鮮やかなる紅葉を一瞥し、猪被害に苦しむ農民の意を汲んだ高鳴る己の胸を、拳で一打し、袴の裾を右手で強く払い、昨夜の雨でまだ僅かに濡れている石畳を力強く蹴り、家老杉村頼母が待つ金石城の櫓門へと向かった。『口上覚』で提出である。

家老杉村頼母は、大広間にて二人の到着を既に待っていた。訥庵は、張詰めた緊張の中『口上覚』を一言一句噛み砕く様に読上げ、そして静かに家老頼母に、目を移し姿勢を正した。頼母は、長く閉じたままの瞼を大きく見開き、緊張に包まれた空気を掬い取り様に、大広間に響き渡る大きな声で『郡奉行大儀であった』と発すると同時に席を立ち去り索漠な空虚だけ残した。何とその三日後に『覚』許可が出されたのである。

以下その根拠となった『猪鹿逐詰之次第』について、現代版での事業の検証を致します。 仮定事項として、当時の大垣、中垣の材料葛かずら等は現在の金網フェンスとし、労務費等は公共事業労務単価に換算しています。 以下その内容について説明します。

島を西東に横断する大垣五箇所工事費＝五億七八七一万円、大垣内を 2 km× 6 km 角分断する中垣工事費（五番大垣南含む）＝十八億八九五六万円、中垣内の茂み等猪隠れそうな場所の焼き払い工事費＝三億六五五八猪鹿逐詰計画万円、中垣内の逐詰工事費＝八億四六二四万円、猪が海上に逃げた時の海上逐詰対策費＝六千四〇七万円、鉄砲玉代、道具等の直接共通費＝六千二五六万円、対馬藩郡奉行等事務経費＝一億四九七六万円、八郷の足軽、人夫等の事務費＝一億二一三八万円、消費税＝二億〇三八九万円、合計四二億八一七六万円であります。

大きいものは、金網材料費＝十一億二八一二万円、労務費＝二十四億二七七二万円である。

公共事業が大幅に削減される中、三百年前に陶山訥庵がなした事業を、第二の公共事業として位置付ければ雇用対策にもなり、猪退治も出来一石二鳥である。

人的被害は続出しており、現状では被害の拡大は免れまい。既に猪対策費として現在まで六億円費やし今後も増大する一方である。トンネル一箇所でも四十億円掛かる時代。『コンクリートから人へ』と新政権政党が謳うなら本事業は必須事業ではないか。事業を現在実施検証する事は、被害に苦しむ日本全土の対策指針ともなる。温故知新、今がまさに実行の時であろう。